



城山の湧水に思う

最近、散歩代わりに地元板橋の最高峰(?)『城山』(443メートル)に毎朝登っている。自宅から山頂まで歩いて35~40分。1時間10分程度で往復できる。

今年の夏には日光市の町おこし事業で登り道に丸太で階段がつけられ、頂上にはあずまやができた。このあずまや付近からは大沢、落合地区はもちろん日光連山・高原山を望むことができ、晴天の日にははるかに富士山を拝することができる。

頂上から降りてきて木製の階段が終わった頃どこからともなく小さな水音が聞こえてくる。湧水があるのだ。最初のはまるで水禽窟のような密やかな水音がしているが、やがて小さな谷川のせせらぎの音へと変わっていく。それほど水量はないのだが一年中枯れることはない。中世の山城であった頃には、この湧水はおそらく貴重なものであっただろう。

その流れは道よりもどんどん低くなっていき、やがて林道の行き止まりの駐車スペースのところで小さな澄み切った池となる。水が少ない下板橋では下流の農業用水のあてにもされていたのか、今でも上り口付近まで下ると取水用のパイプが見られる。少しの水にも気を配った先人の苦労には頭が下がる。

さらに下って麓の下板橋に入ると、昨年、山麓近くまで圃場(ホジョウ)整備が行われて立派な農道ができ、水路は付け替えられてコンクリートで固められてしまった。

話は変わるが、下板橋に近い小代でも11月に圃場整備の工事にともなう、魚類・両生類・水生昆虫などの『引越し作戦』が行われ、私も「シモツケコウホネと里を守る会」から参加させてもらった。指定された水路に入って網を使ってみるとシマドジョウやツチガエル、そのオタマジャクシなどが大量にかかって驚いた。同じ水路からアカハライモリも多数捕獲され、調査書にはなかったタガメなども救出(?)された。

日だまりのこの水路は、あるいは多くの生き物たちが寒さを避けようと集まっていたのかもしれないが、それにしても、その種類、数の豊富さは予想をはるかに超えるものだった。表面的にただ歩いたり、見ただけでは全く気がつかなかった田んぼの周りの生き物の多様性、自然の奥深さに改めて圧倒された。これらの水路は今冬には埋められてコンクリート水路に変わることになるわけで、複雑な思いを抱いて帰路に着いた。

圃場整備事業が高齢化など働き手が少なくなった農家の皆さんにとってワラをもすがる思いの事業であることは百も承知なのだがその効果一点張りの工法には首を傾げざるを得ない。他の生き物との共存を真剣に考えているとはいえない姿勢を見ると、われわれ人間が必ずやそのしっぺ返しを何らかの形で受けることになるという思いに駆られて仕方がない。それが自然の摂理というものだろう。人間の都合ばかりを言い募るのではなく、さまざまな生き物たちの声に耳を傾ける、共存、共生の視点をわれわれはこれからでも形成し、強化していけるのだろうか。(森)

目次:

城山の湧水に思う 1

トビムシ・カニムシ・ザトウムシ 2

小笠原ジャングル探索記 3

ピンボケ記 4
鬼怒川の支流から

お知らせ

定例会+新年会

1月11日(日) 11:00~

詳しい時間と場所は事務局にお問い合わせください

川むしたんけん隊 (NPO法人なんとなくのにわ・サイエンス・カフェ18)

日時: 10月5日(日) 場所: 行川(明神駅近く、右写真)

「NPO法人なんとなくのにわ」のイベントに協力。

気温22℃・水温16℃、川幅およそ10mの側流を中心に生物調査を行いました。カワゲラ、ヒラタカゲロウ、トビケラ、ヘビトンボ、カワニナ、コオニヤンマの幼虫など多様な水生生物がみつかりました。ホトケドジョウ、シマドジョウ、ハヤなどの魚類も多数。周囲は、田畑や人家が散在する環境ですが、行川上流と同様、きれいな水に棲む生物が多く、日光市の水の豊かさを再認識した観察会でした。



今市周辺では、どこでも見られる、普通の川。多様な生き物がこの水の中で暮らしています。

トビムシ・カニムシ・ザトウムシ

- 足元に生きる小さなものたち -

先日、ある会で、トビムシと水生カメムシをそれぞれ研究しているという二人の大学生と知り合いました。二人とも南関東の出身で、子供の頃からこれらの生き物に興味を持ち続けていたそうです。彼らから教えられた世界を少し紹介します。

トビムシは1～3ミリの土壌動物の一種、土から飛び出してピョンピョン跳ねるこの虫は多くの方がきっと目にしているはずなのですが、私もこれまで全く気にも留めずに無関心すぎたことを今回改めて思い知らされました。土壌動物とは0.3ミリほどのダニから40センチにもなるミミズも含まれ、ザトウムシ、カニムシ、アザミウマなど初めて聞く名前ばかりでしたが、土をフルイにかけると見つかるこの虫達は枯れ葉や朽木を土に戻す役目を果たすものもいて、彼らの存在によってその土の質がわかるのだそうです。水質の指標生物となっている水生昆虫の調べ方と通ずるものがあると思いました。ザトウムシは3～5ミリぐらい、頭部が目立たなくて肩からいきなり長い脚が出ている虫ということ、思わず映画の座頭市を想像してしまうのは私だけではないと思うのですが…。カニムシは2～4ミリ、蟹そっくりの前脚を持っているそうです。この小さな虫がハサミを振り上げている姿はどんなものなのでしょう。実物を確かめてみたくなりました。足元の土の中で、毎日毎日せっせと土を作り出している彼らがとてもいとおしく思えてきました。

ところで二年前の秋、当会で行った「田川を歩く会（猪倉から徳次郎まで）」に参加して下さった皆さん、あの時用水の溜りでタガメを見つけたことを覚えておいででしょうか。かなり大きなタガメでしたね。タガメは水生カメムシ目で、タイコウチ・ミズカマキリ・アメンボ・コオイムシなどと同じ仲間ですが、神奈川県では既に絶滅してしまったそうです。そのため那須にフィールドを求め、年に数回調査をしている前述の大学生が今市のタガメをぜひ見たいと言ってきました。それで11月中旬、現地を案内することになったのですが、果たして見つかる



だろうかと内心心配でもありました。記憶を頼りに来てみると、あの水路にいました、いました、あの子孫がしっかり生きていました！タイコウチもドジョウ3種類も、他にもいろいろ見つかって、本当にほっとしました。この場所は圃場整備を拒んだ地域なので田川は蛇行しているし、昔ながらの水路もしっかり残っています。タガメだけでなく、周りの景観にも喚声をあげている大学生に「ここは貴重な場所ですからしっかり守ってください！」と念を押されてしまったように感じました。

それにしても、これほど生き物に関心を寄せている若者が都会生まれの都会育ちというのが私には大きな驚きでした。トビムシを勉強しているのが女性というのも頼もしかったです。でも翻って、ここ今市ではどうでしょう。子供達は身近な生き物と接しているのでしょうか。山に行けば、水辺に行けば、小さないろいろな生き物たちがしっかり生きていられるのを見つけることができるはず。そういう機会を作っていきたいものです。「今市は宝の山ですね～」と大学生達は言ってくれましたが、ここに住んでいる私もまだまだ知らないことが多いと思っています。子供達に関心を持たせる前に、まず大人が動き出さなくては…。でも、環境を良くしよう！とゴミ拾いばかりに子供達を動員していたらウンザリする子供も出てくるはずですから、まず大人が生き物と接する楽しみを見出すことが最初の関門になるでしょう。水辺の次は林の中をゴソゴソと…、こんな生き物探しを楽しんでみませんか。

(塚崎)

(注1) 会員の中島さんから寄せられた探索記です。山行年月日:2007/4/14 メンバー:中島(単独)

行程: 秘密でない宿(YH) 9:10-小港 9:25-中山峠 9:40-ブタ海岸 10:00-高山 10:40-高山南端 11:00-高山鞍部 11:30-稜線 12:15-千尋岩西端 12:30-千尋岩(ハートロック) 13:00-小港 14:30

(注2) 小笠原の山羊の生い立ちと現状の待遇について

小笠原に人間が住み着いたのはここ百数十年程前である。人間が住み着けば家畜も連れてくる。この山羊さんは家畜であったのだが、昭和19年太平洋戦争末期民間人は強制疎開させられ、軍人の貴重な食料として山羊さんは戦地に残された。戦争も終わり、この小笠原諸島はアメリカの占領下に置かれ山羊さんは「生きて生きて生き抜いて」やっと自由の身となり野山を駆け回ったのであった。小笠原は陸地誕生以来一度も大陸と地が繋がった事が無く独自の自然を形成した。この独自に進化した各々の種、これを「固有種」というのだが、今この固有種を食べてしまい、本来あった自然形態が破壊されつつある。自然破壊の張本人…いや張本獣…の一つ、つまり厄介者として扱われているのだ。まして「世界遺産」に登録しようと躍起になっている方達から見ればいかほど邪魔な存在だろうか…

東京都小笠原村父島千尋岩(ハートロック)

ジャングル探索記(注1)

今日は久々によく晴れている。

朝七時過ぎ同宿のHさんが母島に渡るので棧橋まで見送りに行く。この船で島友人のM君も娘と母島に渡るらしい。可愛い娘さんはまだ3歳。この小笠原は不思議な所である。親父は仕事なのに娘も同行したら仕事にならないではないか！しかしここは東京番外地。すぐに子ども達は仲良くなれる。今日は母島の子達と遊ぶのだ。

そんじゃ「元気にいってらっしゃい!!!」この時期の父島母島間の「ははしま丸」からは、下手な観光船も顔負けする程、鯨を見る事が出来る。楽しんでこいよー！大きく手を振り船出を見送る。

さて今日は晴れたことだし、行くか！でも午後から天気は崩れるかもしれない。以前から一度は歩いてみたいと密かに考えており、その為に地図・コンパス・ハーネス・鉈などを準備しての渡島であった。また今回が最後の小笠原かもしれないので少しくらいの悪天候でも歩きたいコースであった。よし、決行だ！

父島での食事はほぼ自炊である。今後の山行を考えて訓練も兼ね、少しでも慣れておかねば…と自炊道具も持参した。今朝も自炊。島の友人の一人でもあるMさんから頂いた混ぜご飯の具を入れて炊いた飯はとても美味しい。汁は水餃子で簡単に済まし、昼飯は「おいなさん」を作った。吾ながら中々のものである。これで腹は満ちた。颯爽と風を切り南国の島を駆け抜ける…愛車「げんちゃり」にまたがり目指すは父島最大の小港海岸。いつ来ても大らかで開放感溢れる浜だ。

早々に先を目指す。今日の工程は遅くとも17時までには下山と考えているが、ジャングルを歩くので未知数である。不安と好奇心をもって先を急ぐ。高瀬川に掛かる橋は面白い。左岸に格子戸があるのだが、この扉は山羊避けのものである。どれほどの効果があるのか疑問ではあるが、「ここには山羊がいますよ」程度の宣伝効果はあるだろう。なんせ、ここから先の高山近辺…ちゅうか山には至る所に山羊が生息しているのだから(注2)。

この格子戸を潜り抜け中山峠へと階段を登る。すぐ左に戦時中掘った洞窟を見ながら高度を稼ぐと徐々にエメラルドグリーンの小港の浜が見えてくる。

15分も登ると別世界の美しさである。峠を挟んで反対には「紅の豚」のモデルになったと云われる？南島が見える。眼下にはブタ海岸。(何故ブタなのか分からないが、小笠原には奇々怪々な名称が多い。コペペ海岸などなど)向かいには標高230mの高山。この峠にやっと登ったのだが、一度ブタ海岸迄降り海拔0mから再び登らねばならない。

高山頂上一帯も戦時中の塹壕で穴ぼこだらけである。南国の日差しが強く、あまり日陰を確保できず時間も気になるので、南端迄駆け抜ける。此処からの眺めも素晴らしい。南島・千尋岩・遙か南に母島列島が眺望される。これから走破する道筋を確認すべく地図と地形を合わせ望遠鏡で千尋岩迄くまなく見渡す。向かいの稜線まで登る枝尾根の岩場の勾配が気になる。最南端は頂上直下の岩場が登れそうに無い。次の枝尾根は中程の岩場がどうか？次は千尋岩から離れてしまう。30分程度のロスを感じなければならぬ。それでも岩場を越さねばならない。南から二番目の枝尾根を登ろう。

さてここからが道無きジャングルに突入!!! おっとその前に腹ごしらえをしなければ。お手製の「お稲荷さん」を食べ、い

ざ出発。なんとなく道らしき跡はあるのだが…。すぐに甘かったと反省。山羊サン達の獣道であった。南側の海沿いは切り立った断崖で、岩質はもろく脆い岩場の連続であり慎重に歩かざるを得ない。岩場を避ける事も出来るのだが樹林帯は勾配がきつく滑ってしまい、やはり岩場の方が歩きやすい。一気に海拔50m位に降りた鞍部に広がる光景。それは外来植物「ハカラメ」の群落であった。このハカラメの花は可愛いものである。ヨソモノ(外来種)というだけで目の敵にされている植物の一つだ。ここまで来てからにわかに雲行きが妖しくなる。引き返すにはすでに標高差150m程下ってしまった。これ以上進むと引き返すには労力がある。悩んだが慎重に立てた計画である。間違いは無い。意を決し、先に進むことにした。

それにしてもここは人類未踏に近い場所の筈なのだがやけに明るい。ガレ場であまり樹木が生えてない場所だからか、吹きぬける潮風が気持ちいい。南端から二番目の枝尾根目指し樹林帯に突き進む。取り付けは急勾配のガレ場でその後は脆い岩場である。見えている岩場自体は登れそうなのだが次の中程の岩場が不安である。

此処まで来ると隣の枝尾根が見え、そちらの方が登りやすそうである。どうしようか迷ったが、安全と時間を考えて安全を取る事にした。一度下り三つの枝尾根のうち一番北寄りを登る。初めから岩場であるが簡単に登れる。でも、クライミングシューズを持ってくれば良かった。中程まで来ると隣の初めに取付いた枝尾根の全貌が見え「よかった！登らなくて…」と思えた。やはり中程の岩の勾配がきつい。此処の岩場はホールドは信用できず崩れそうで怖く、とても登れたものではない。思いのほか簡単に稜線に上がることが出来た。向かいの高山とはほぼ同じ高度まで登る。此処からこれから先の道筋も何とか確認できる。尾根ははっきりしているし、南端の断崖目指せばいいので地図を見なくても目的地がよく分かる。が、安全第一！コンパスと地図で現在地を確認しつつ進む。

此処からは樹林帯、ジャングルである。やはり誰も歩いていないのか、下草はほとんど無いのだが、「小笠原ピロウ」の密林で、掻き分ける時そのトゲが跳ね返り体に当たる度に痛い思いをする。

30分程のロスかと思ったがそれ程でもなく、南端の断崖の上に到達でき、東には赤茶けた地肌を見せる「千尋岩」が見える。この地は稜線からも望遠鏡で見えたのであるが、支柱が建っており、長い年月に風化した文字が歴史を感じさせる。その支柱には「陸軍省」「昭和十六年一月十日」と刻まれている。なんと、陸軍省と…そういえば最近、自衛隊が防衛省になったのが重なり合う…。上を見れば空がにわかに暗雲たちこめる。

ここから千尋岩までの行程は密林ではあるが程ほどに歩けた。しかし密林より断崖の淵が歩きやすく、緊張の連続で怖いのだがスリルを味わいつつ辿り着く。見覚えのある赤茶けて滑りやすい地肌である。二年前に子どもと訪れた懐かしい場所である。

ここもまた戦跡があり、塹壕に半世紀以上前の大砲が残置されている。200mの高さに掘られたその塹壕から望む太平洋は広大で、虚しく朽ち果てた砲塔の指す先は何を見ていたのだろうか？遙か遠い過去の見知らぬ世界がおぼろげながら幻想のごとく脳裏を駆け巡った。

雨が降り出した。早々に千尋岩を後にして、此処からは、よく歩かれている登山道を一気に駆け下り、小港の出発点に戻った。(中島)

～ピンボケ記～

鬼怒川の支流から(土呂部)



大きな森ときれいな沢のあるここは、とても楽しいところ。この木は、いつ見ても不思議？ きっと土呂部トコの住み家だと思ふよ。



これなんだかわかりますか？ ヤマブドウの蔓が沢水に洗われて、途中から発根しているんだ。もうフサフサとね... この沢水、発毛剤になんないかな？



豊かな森は水を育て、そしてキノコも育てる。この日の恵みは、ナラタケ、クリタケ、ムキタケ、ブナシメジなど。みんなキノコ鍋にして、いただきました。(隅)

編集後記

7月に25号を発行して、やれやれと思っているうちに2008年も暮れようとしています。やっと「だいや川通信・26号」が形になりました。原稿や写真をお寄せいただいた皆様に感謝します。最後に手がかかるのがこの後記。いつも何を書こうかと考えているうちに数日が過ぎてしまいます...●以前、ある集まりで、トウモロコシやジャガイモは中南米が原産で、ヨーロッパに伝わったのはコロンブスが持ち帰ってからのことだと聞き、ちょっと意外に思ったことがありました。ドイツ料理というとジャガイモを連想します。ヨーロッパ人は古くからジャガイモを食べていたという印象を持っていました●「ジャガイモのきた道」という岩波新書の近刊は、食料としてのジャガイモの歴史がわかりやすく描かれています。著者は「イモは文明を生まない」という民族学の定説に疑問を持ち、丹念な調査を積み上げて反論しています。食糧と人間社会との関連について、まだまだわかっていないし、先入観で考えてしまっていることが多いのだなとあらためて思いました●普段何気なく眺めている川の流れも、先入観にとらわれず観察を続ければ、動植物たちの暮らしや人間の生活との関連が見えてくるのかもしれない。来年も本会のイベント、本通信などへのご協力をよろしくお願い致します。(T)